

文明の基盤としての文化

米 山 俊 直

The Regional Culture as a Basis of a Civilization

YONEYAMA Toshinao

まえがき

去る2000年11月11日午後2時から3時まで、沖縄国際大学で開催された第18回比較文明学会大会で、私は表記の題で基調講演をおこなった。これは、この大会の共通テーマである「文明の基礎としての文化」の一環として、伊東俊太郎会長から依頼されたものである。

その要旨は「比較文明学会報34号」に巻頭言として要約したが、ここにその全文を掲載して、ご批判を賜りたいと思う。

1. バリ島の経験から

私自身は沖縄を訪問したのは二度目で、沖縄についてほとんど何も知らない人間ですので、沖縄文化についてのお話はあとにつづく諸先生の公開シンポジウムに譲ることとし、与えられましたテーマについて、日頃考えておりますことをお話したいと思います。はじめに、去る五月に短時日ですが初めて訪問しました、インドネシアのバリ島のことから話してみたいと思います。

これは木村重信先生が会長である民族芸術学会の研究大会が、海外で開催されたのに参加したものです。組織委員長は大橋力千葉工大教授、というよりも芸能山城組の組頭、山城祥二として良く知られた方であります。芸能山城組は、長い間バリ島とかかわりを持ち、ケチャを日本にも紹介されていますし、現地の劇場建設にも協力されています。この大橋さんの抜群のガイドによって、島の様子を知ることができました。

バリ島はインドネシア共和国の一万七千の島々のひとつで、行政区としては正式にはバリ州、他がイスラーム化しているこの国で、古いヒンドゥーの伝統を残している島として

良く知られ、また観光地としても有名であります。面積が563平方キロで、淡路島の593平方キロよりやや小さい島であります。人口は約280万人だそうです。

皆様のなかには、バリをよくご存知の方がすくなくないと思いますのに、あえて私の初体験のことから申し上げようと思ったのは、この島が、私に本日与えられたテーマにまことにふさわしい事例ではないか、と思ったからであります。

私たちは夕方、島の最高峰であるアグン山3142メートルを見ながらデンパサール空港に着き、バスでウブド村にあるホテルに宿泊。ウブドの王様の経営するホテルは、コテージの集合体の作りで、それぞれが独立家屋で、庭にはプールもあるというすばらしい施設でした。観光を主要な産業にしている島で、さすがと思いました。

翌朝は、“バリ島概観視察”ということで、まずバトゥラン村のバロン劇をたくさんの外国人観光客とともに見物して、そのあとバトゥール山1750メートルに近い、水利寺院の本山とされているウルングヌ・バトゥール寺院に登って、庭で礼拝、灌頂を受け、キンタマーニ高原の食堂で昼食をとりました。下山の途次にさまざまな風物を見学しました。まずトゥララガン村で棚田を見学、つづいてマス村の木彫、チュルク村の金銀細工、バトゥラン村の石彫、トパティ村の更紗工房などを見学しました。いわば、一村一品運動風に、村々がそれぞれ専門化した技術をもって主として観光客向けの作品を作っているわけです。

といってもこれらの村々は水田稲作を生業としております。その稲作も、一年三毛作といわれる水田であります。バスの車窓からも、片方で稲刈りを、他方では田植えをしている光景に実際にぶつかりました。日中の強烈な日差しの間は、農作業はできません。その間に一村一品的な工芸作品をつくり、またケチャやバロン劇の練習をしているのだと聞きました。道で寺院への供物を頭に載せた女性たちを見ましたが、それが日常的に行われているそうです。また道端の路上にも供物が置かれていましたが、それは悪霊に対するお供えだということです。その腐敗臭が、供養になるのだということでした。

大橋さんの説明によると、この島には溜池がない、ということでした。その理由は、バトゥール山をはじめとする火山群の火口湖が天然の水源になっていて、そこから豊かな水が流れ落ちている。あるところでは伏流水になっている、ということでした。それが、この水田稲作をささえ、ウブド村のような中ほどの広々とした水田地帯を形成しているのです。

島の鳥瞰図をご紹介します。火山島であってアグン山をはじめとする高山が、水源になっているわけです。この図では、道路が白線で書き込まれていますが、これと平行して灌漑水路が山の中腹から平地部にかけて網の目のように展開しているのです。水利慣行の慣習法アグットは厳格で、水利組織によって管理され、王家であってもその組織の一員として秩序に従わねばならない、ということでもあります。

バリ島の最高峰のアグン山3142メートルは聖なる山とされ、それに向かう方角カジャを聖なる方角、海の方角クロッドは悪霊の領域を指すのだとも聞きました。集会でも上席はカジャのほうに位置し、寺院の位置や火葬の場、あるいは屋敷の構造にもこの“方位”が重要であるとも聞きました。バリ島の文明の独特の基盤がそこにあるようです。

2. 灌漑文明

このようにバリ島の風物に触れて見ると、自然にわが国の文化を思い起こさせます。ウルダヌ・バトゥール寺院の庭で灌頂をうけながら、私は本日の講演のことを考えておりました。伊東俊太郎会長から、「文明の基盤としての文化」というテーマで話すようにという指示をいただき、それを承諾していました。ご承知の通り、伊東先生は文明の基盤に文化がある、という主張をなさっています。バリ島の文明の基盤に、その灌漑組織があるように、日本文明の基盤に水利組織があり、灌漑文明Irrigation Civilization がある。灌漑文明という言葉を用いてシンポジウムをやったのは、私の師匠のひとりジュリアン・スチュワードであります。その時にパネルに参加した人の中に水利社会Hydraulic societyという言葉を用いて大著『東洋的専制主義』を書いたカール・ウイットフォーゲルがいます。私はそのような学生時代に学んだことを思い出していました。

かつて東畑精一博士が、国際会議で「あなたの国にはエジプトのピラミッドに比すべきものがあるのをご存じか」と聞かれ、返答に窮していると、「それは、あの日本のいたるところにあり、汽車から見える棚田ですよ」と言われたそうです。山頂近くまで、石垣を築き、水の漏れない水平面をつくり、それを見事に維持して行くには、実に驚くばかりの労働力が、幾百人、幾千人もの農民によって、長い間注がれてきたものであります。その点では、あのエジプトのピラミッドの建設に注がれたエネルギーに匹敵するのではないか。「日本で驚いたことはたくさんあるけれども、あの日本のピラミッド—棚田を目のあたりにしたときの驚きには比べるものがありません」と言われたそうです。

最近では棚田学会というような組織ができているそうですが、ほんとうに棚田に投下された労働力は巨大なもので、棚田の景観はピラミッドに比肩するような人間の営為の結果といえるでしょう。

速水融教授が「勤勉革命Industrious Revolution」と呼んで、「産業革命Industrial Revolution」と対比してみせた江戸期日本の発展も、そのひとつの結果でありましょうが、弥生時代以来の水田稲作農耕が普及して行く過程では、まず盆地や河谷段丘を利用する棚田が構築され、やがて沖積平野にまで新田開発が展開していったと言えるでしょう。

日本の水田稲作文化の伝統は、現在では縄文時代晩期には本格的な稲作が存在していたことが、九州の板付遺跡などから証拠だてられています。縄文農耕を要約しますと、縄文前期（BP6000年頃）から原初的農耕（ヒヨウタン、リョクトウ、ケツルアズキ、エゴマ、

シソ、ゴボウ、その他の栽培)が開始され、縄文後期(BP4000年頃)から焼畑を中心に畑作、天水田による稲作をふくむ「初期的農耕」段階に入り、縄文後期から弥生時代初期には本格的な稲作農耕文化の段階に入ったというのが、中尾佐助、佐々木高明、渡部忠世、上山春平、谷泰が参加した『稲作文化』(上山・渡部編:1985)の結論であります。

なお私は、文明は千年紀を単位に、文化は世紀(百年)を単位にして論ずべきだと考えていて、文明についてはBPを用いるべきではないかと思っています。

3. 日本の水利社会：愛媛県大西町宮脇の事例－河野正文氏の報告から

さて、私はバリ島での学会で、日本の水利社会についての報告を聞きました。第16回民族芸術学会そのものは、バリ島の国立ウダナヤ大学を会場として開かれ、木村会長と現地のウダナヤ大学のイ・ワン・グリア教授の基調講演のあと、研究報告がありました。第1部はバリ島研究でしたが、第2部には日本の事例の研究報告もあり、そのなかで、河野正文さんの「大井八幡神社の春祭りと水系制御」という報告を聞いて、感心しました。それは、ここで主題としているテーマにまさにピッタリのものでした。私はその報告を聞いたのち、帰国してからも連絡を取り、去る8月に現地を訪問して河野さんに再会し、その案内で現状を見せてもらい、報告の内容を今日の私の話に織り込むことを許可していただいていたりました。河野さんは大橋力教授らとの共同論文をはじめ、すでに沢山の業績がある人ですが、現在は愛媛県大西町の下木課長さんとして勤務されている方です。今治市に隣接する大西町の大字宮脇は、もと宮脇村と呼ばれ、北の瀬戸内海にむかって開けた土地で、町の9つの地区のひとつであります。ここには弥生時代の遺跡があって、発掘調査が行われました。もみ痕を伴った土器も発掘されていて、古くからの定住の歴史がうかがえるところです。

瀬戸内気候なので年間降雨量が1300ミリ以下とすくなく、また傾斜地のために雨水もすぐに海に流れ込んでしまうので、古来溜池と灌漑用水路の施設の管理に大きい努力が払われてきました。小字名に東新開、西新開という地名があるので、水田開発もおこなわれたことが推測されますが、宮脇の石高は松山藩検地記録に1700年(元禄13年)に723石9斗0升4合、1868年(明治元年)には730石7斗0升7合で、わずか6石8斗の増加なので、新田開発は元禄以前のものともみなされています。

宮脇では耕地の割替制度「地坪(じならし)」の慣習がありました。これは、村内の土地すべてを村民の共有としたうえで、「村中立会のもとに一筆ごとの土地の大小、等級付け、石盛りを決定し、次にこの一筆ごとの土地を土質・水利・交通運輸などの良否便利を考慮して十数段階に区分し、この区分した土地を種々組合せて一定単位のくじをつくる。これを各百姓が従来から保持していた石高にしたがってひかせるというものである。」

それを宮脇では1812年(文化9年)に行ったことが記録されています。

この制度のもとには慣行として伝承されてきた“土地所有の交替制”にあると考えられています。土地交替の単位は“かぶ”と呼ばれる谷が基本になっており、それは同時に小さなお宮を祀る氏子の単位でもありました。この“かぶ”組織には、また“かぶ”と呼ばれる長老がいて、この“かぶ”長老が連合して谷ごとの土地交換をしていたという伝承があるそうです。この土地利用慣行は、1873年（明治6年）の地租改正まで続けられていたといわれます。さらに宮脇地区では、この慣行に加えて“ナラシ”という小作人相互の耕作地の交替制を戦後の農地改革までおこなっていた地主もあったといえます。つまり、土地区画の所有・耕作権を年限を区切ってある家から他の家へ、あるいはある人から他の人へ交替させるという、きわめて流動的な土地所有制度の伝統があったといえます。

旱魃のときの水争いは、日本各地で村落社会を揺るがせる紛争、騒動になっていましたが、その対策として、ひとつはこの自然災害の回避を神に祈り、他方でできるかぎり合理的に水をめぐる紛争を解決する工夫が、社会組織に組みこまれていたのです。

神に祈るほうは、宮脇の場合では氏神の大井八幡神社の祭礼にうかがえます。8世紀から鎮座するこの神社は、松山藩領となってからは野間郷三大社のひとつとして、代官の申し出で頻繁に雨乞い祈禱、五穀祭が営まれてきました。毎年5月19日の祭礼は、旧8月27日であったといわれます。丘の上の神社本殿から85段の石段の下の馬場までの境内で、先払いの芸能の列が芸能を披露してから行列を先導します。“やぐら”とよばれる山車の台の上に4人の子供が小太鼓をたたいて囃し、かけ合いで音頭をうたい、大人たちがそれを曳きます。ついで“奴”による“大名行列”。9人が傘を投げあい、のちの8人が槍を投げ合いながら行進します。つづいて“獅子”で雌雄一对の獅子が“保存会”のメンバーによって演じられます。そして神輿がきますが、大人の神輿2基、子供神輿が8基登場します。これが渡御列の最後になりますが、渡御列の通過後、石段下の馬場で獅子の“場づかい”というパフォーマンス、神輿の“お旅”儀式、そして1981年（昭和56年）から開始されたという4人の少女による“浦安の舞”奉納があります。

この祭礼を支えているのは旧村単位の“オトウ”とよばれる組織で、近畿地方では宮座とふつう呼ばれている祭祀組織です。宮脇では厄年の男子が“オトウ”になり、それを受けた人（乙名—おとな）は大きい社会的評価を与えられるといわれます。また大井八幡神社そのものの“オオオトウ”という役があって、きびしい物忌みを経験するものとされています。神社の祭祀組織全体は宮脇、新町、大井浜の氏子の連合体で、古い氏子4～500人で、それに新しく移住した人々を加えて800世帯ということです。

宮脇には村の中に5つの“小宮”と呼ばれる小さい神社があり、それぞれやはり“オトウ”をもっています。そのなかには、一度官の命令で明治5年大井八幡に合祀されたけれども、氏子の強い願いで明治10年もとに“還座”した諏訪大明神社もあります。

この5つの“小宮”と別に、さらに小さい神様“やぶかみさん”とよばれる小祠があり

ます。それは“ガワ”と呼ばれる近隣集団のいくつかが集まって“オトウ”になっています。“ガワ”は冠婚葬祭や農業の相互扶助など、日常的な地縁的基礎集団であります。

さて、宮脇は傾斜地で棚田が多く、溜池に水を貯めて配分するシステムが必要であり、それははやくから確立していました。ムラの川の主流である宮脇川の東に11、西に4の溜池があり、それぞれが上流下流の関係をもちながらネットワークを作っています。それぞれの池は大小の集水域をもっていて、なかには宮脇川と平行して流れている山之内川から取水している場合もあります。まず天水に頼っている水利組織に、池が弾力性を与えていて、渇水期には“ワタシ”と呼ばれる非常用の水路（樋）が活性化されます。

水の管理は、“役”と呼ばれる共同作業で維持されています。“役”には“村役”と“ガワ役”があり、村役は耕地を単位に、またガワ役はガワすなわち地縁的小組合を単位になっている。耕地は水系にしたがって奥耕地、中通り耕地など5つにわかれています。ガワは、それが細分化された地縁組織であります。また“池番”、“堰番”という役もありまして、さらに水不足のときには特別に“水番”という監視・管理役がつけられる慣習になっていました。池単位でその利用者が集まって協議、水番を交替でおこない、勝手な利用を禁止しました。池番と水番を分離することは非常事態に対応する準備ではありますが、管理が分離しているので、独走できず、双方協議によって解決するという、耕地内での紛争を抑止する機能をもっていたといえるでしょう。バリ島の慣習法アダットを連想させます。溜池と水路のシステムに、密度の高い秩序が制度化されていたといえます。

伝統的に“かぶ”と呼ばれてきたものは、現在では“ガワ”という地縁的小単位になっています。それは“やぶかみさん”と“小宮”の共同祭祀に参加し、さらに大井八幡神社の氏子として統合されているわけです。それを水利組織の面から見ると、“ガワ”は5つの“耕地”にまとめられ、さらに奥と町という2つの耕地連合体としてまとめられます。祭礼の時には奥は獅子、奴、神輿を担当し、集会場をもっています。町はやぐらと神輿を担当し、ここも集会場をもっています。すなわち、水利組織と祭祀組織は宮脇地区として統合されているのであります。

河野さんは大橋さんとの共著論文で、祭礼での中立的・超越的・神秘的媒体としての神事芸能の機能が、葛藤制御に果たす役割、制御回路としての「情動」、”神々という名の制御回路”についてのべていますが、ここではこれ以上立ち入らないことにします。

河野さんの報告は、スライドをまじえて、獅子の立ち芸、やぐら、若衆奴、神輿をオトウの家に運び込むサカムカエの儀式、皆廻池（かいもりいけ）に投げこまれる行事などのパフォーマンスを紹介し、さらに都市化の中で「水田基盤整備事業」と「今治広域都市計画公園」が宮脇の慣行水利権をめぐる十数年、26回の会合の結果として、13ヘクタールの「健康都市公園」が誕生し、年間12万人の人々を集める施設になったこと、また渇水期には“寺樋かかり”という下の田から上の田に水を還流させる装置、あるいは危機に瀕し

た時には山之内川の水を宮脇川や才鳥池を越えて皆廻（かいもり）池にわたす“大渡し”というしかけをしっかりと「協議要録」として残したことが報告されました。

私は、現地で建設の終わった公園、そのなかに取り込まれたかいもり池と、そばに作られた歴史資料館、そして妙見山の山頂の古墳を中心とする古墳公園を見学してきました。「26回の協議会は、350年に渡って守り育てたかいもり池という「財」を、公園という「形」に変えて後世に残す作業の場であった」と河野さんのレジュメには誇り高く述べています。公園の一角に、寺谷の妙見神社という“やぶかみさん”が復元されていました。もとその境内であった場所に、明治時代の神社合祀で消滅していた祠を復活し、そこで祭りが復活した、ということも、興味のあることでした。

ウィットフォーゲルは『東洋的専制主義』1956という大著で、水利社会の特性がオリエンタル・デスポティズムを生んだとして、日本もその周縁の水利社会であるとしています。「禹の治水」として有名な中国古代の堯・舜とならぶ聖王の伝説、夏王朝の祖とされる禹王の話はよく知られていますが、黄河の治水が中国文明にとっては死活問題であり水を治める者が天下を治めるという思想は長く東洋思想のなかにありました。治水が広域支配—中央主権的支配体制の国家を形成したと捉えていることは肯定できます。

この大西町宮脇の事例は、小規模ながら水田稲作農耕を基盤とした地域の自律的な文化の持続性、現代社会への適応の実例をしめしている、日本文明の基盤にこうした水利社会が存在していることをよく示していると思います。日本文明の基盤に弥生以来の農耕文化の伝統があったことはたしかであります。

4. 縄文文化の伝統について

従来、日本文明はB.C.300年頃から日本列島に伝播してきた水田稲作農耕にはじまる、という説が通説になっておりました。伊東先生の有名な図でも、23の世界の諸文明のなかで、日本文明は1300年ほどの長さで示されています。

しかし、近年、青森市内、南西の丘にひろがる三内丸山の縄文遺跡の発掘が進むにつれて、この常識が覆されかねないことになりました。

三内丸山の遺跡については、ご存知の方が多いと思いますが、ここでその特徴的な事項を箇条書き的に申し上げます。

① この東北北部から北海道南部の地域は、考古学では円筒式土器の出土する地域として、その様式の編年もよくできておりました。三内丸山遺跡のトレンチからは、その編年通りの一連の様式の土器が整然と発掘され、その結果、今から5500年前から4000年前まで、およそ1500年に渡って持続的に集落が存在していたことが明らかになりました。

② 集落の規模は、35ヘクタールにおよび、住居、墓、倉庫、ごみ捨て場などが、整然と残っていて、計画的な集落づくりが存在していることがはっきりしました。

③ 出土品は3年間でダンボール4万箱という膨大な量に達し、まだその数十倍の遺物が未発掘の状態であります。土器、石器のほか、5500年前の樹木や、ヤマブドウ、サルナシ、ヤマグワ、キイチゴなどの種実や、花粉、寄生虫卵、植物遺伝子なども注意深く発掘されました。

④ 直径約1メートルの掘立て柱の跡が6つ、整然と並んで発見され、そこにはクリの巨木が立てられていたことが明らかになりました。高さ20メートルの列柱で、それは復元されましたが、いまは櫓状の構築物だけで、その上にどのような構造物（屋根、家屋など）が載っていたかは論争のあるところで、未決着です。

⑤ 静岡大学の育種遺伝学者佐藤洋一郎助教授は、花粉分析の結果、集落の周辺にはクリ林が広がっていたと推定しています。これは、自然状態の森から、クリだけを選択的に残した可能性があり、“栽培”の原型ではないか、と想像されます。またウルシも大量の種子が見つかっていて、これも栽培されていた可能性があります。ヒョウタン、エゴマ、ゴボウなどの栽培していた種子が見つかり、また炭化したヒエの種子も見つかったので、農耕が存在したことは確かです。考えてみると、縄文人は新石器革命後の人々ですから、農耕をしても不思議ではありません。むしろ、佐々木高明さんなどが熱心に縄文農耕論を提唱するまで、縄文人は農耕を知らない、未開野蛮な生活をしていると思いきや、思えてきたふしがあるわけです。考古学者の罪というよりも、進化論的、発展段階説的に歴史を見る19世紀進化論、あるいはマルクスの発展段階説に呪縛されていた時代のせいといえるでしょう。

⑥ ウルシはいうまでもなく漆器の原料ですが、発掘品の中には非常に精巧なろくろを用いたような形の木椀に赤漆が塗ってあります。物質文化のなかでは、漆塗の櫛、網代編みのポシェットがそのまま発掘されていますし、繊維を編んだ編布（あんぎん）もあり、皮の衣服もありました。

⑦ 食料のなかで魚類も重要です。春には内湾に回遊するイワシ、浜辺のアサリ・ハマグリ、夏には外洋近くでマダイ・クロダイ・マグロ・ブリなどの大型魚、秋はアジ・サバなどが捕獲されていて、骨角器の道具があり、魚の骨、貝殻なども大量にあります。山では春にゼンマイ・ワラビなど、秋にはクリ・クルミ・トチノミなどが採集されます。冬は主に狩猟で、イノシシ・ニホンジカなどの野獣、ガン・カモ類などの渡り鳥も重要な蛋白源でありました。

⑧ もっとも注目をあつめているのは、ヒスイの玉であります。普通はカツオブシ型の加工品が多いのですが、三内丸山では直径4.8センチの球形の玉が出土しています。ヒスイは原産地が新潟県糸魚川市の長者ヶ原遺跡周辺しかありません。その原石、半製品、そして完成品が、ここでは出土しているので、ここに原石が運ばれ、加工されたこととなります。

⑨ 同様に、遠くから運ばれてきた物質文化として、北海道産の黒曜石があります。これは鏃の原料です。また鏃を矢の軸に接着するためのアスファルトが、秋田県下から来ています。また装飾品としてのコハクが岩手県久慈市から来ています。このようなものの存在から、これらの物財をもちこむ、交易、運搬の手段の存在、いわば商業的機能の存在していたことは明白であります。小山修三・岡田康博両氏の『縄文時代の商人たち』（2000年洋泉社新書）は、このあたりのことを詳しく検討しています。

⑩ この遺跡には幅12メートルの道路が、420メートル以上も続いていて、それは縄文海進時代には海岸であったと推定されている、現在の青森市街のほうに向かっています。その先端には、棧橋ないし港があったと推定されていますが、未発掘です。

その道路に沿って子供の墓、幼児甕棺が整然と埋葬されています。成人の墓地は集落の外にあります。なぜ子供だけが集落の中に埋められているのか、これも疑問です。

⑪ 建築には500棟以上の半地下式竪穴住居跡のほか、長径が10メートルの楕円形の大建物（ロングハウス）もあります。この建物の用途は、殯などの祭祀用施設、首長の住居、若者小屋、食料倉庫などさまざまな説があります。他に4棟の高床式家屋があり、これは倉庫だったろうとされています。

岡村道雄氏の『縄文の生活誌』（日本の歴史01巻、講談社、2000）は、最近刊行された本ですが、そこには「三内丸山遺跡の生活誌」という章があり、このムラの祭りに行く別のムラの氏族の長の13歳の娘アカメが父親とともに三内丸山を訪問するという設定のフィクションのなかに、発掘から得た情報を盛り込むというスタイルで、その雰囲気をも「復元」しています。

⑫ 縄文人の好んだ色はなにか、例のやぐらは本当はどのような意味を持つものか、酒はつくっていたか、などなど、推定はきりがありませんが、最後に大量に存在する土偶について述べておきます。板状土偶と呼ばれるこの土製品は、1500点に達します。それが、80%までが盛り土からの出土であります。十字型の板状で、最大のものは32センチの長さで、しかも90メートルも離れて首と胴体が別に見つかっています。他のヒスイ、ミニチュア土器、装身具なども一緒に見つかっているので、これは儀式に使われ、最後には捨てられたものと推定されています。3カ所このような盛り土の場所があって、祭祀の場所の可能性が高いとされています。

5. 1500年の持続的遺跡の語るもの

縄文時代の区分でいうと縄文前期（6000年～5000年BP）のなかほど5500年前から、縄文中期（5000年～4000年BP）の終わりまで、1500年にわたって存在したこの三内丸山遺跡は、文明学に関心を持つ私たちにも、大きい課題を投げかけています。

まず、その1500年という時間の長さであります。現在から遡って1500年という

AD500年になります。歴史年表で見ますと、552年頃仏教伝来、562年任那の日本府の滅亡、593～622年聖徳太子の摂政で、593年難波四天王寺創建、600年遣隋使派遣、604年十七条憲法制定、607年法隆寺創建、630年遣唐使派遣、645年大化改新、658年阿部比羅夫の蝦夷征討、というような記述がならびます。いうまでもなく現在の日本史は、このあたりから本格的に歴史となってくるわけです。

つまり三内丸山の1500年は、現在の日本史の時間をすっばりとはめこんでしまう時間をもっていることになります。

弥生時代がBC300年頃からということなので、そこから日本史をはじめても、これに800年を追加するだけであります。先程の伊東先生の図に修正をくわえて、時間軸をのばして、三内丸山の持続的時間を書き込んでみますと、それは図のうえではこの様になります。(11ページの図参照)

つまりBC3500年=BP5500年ということは、日本文明の（そのものではなくその先駆的形態、先行する形態）の文化がメソポタミア文明とおなじところまで届いてしまう、ということでもあります。

できれば私は、伊東先生のお許しを得て、この先行形態（三内丸山文化）を図上に書き込みたいのであります。それによって、いくつもの課題が私たちに与えられるということになる、と思います。

① まず、現在の日本文明を相対化してとらえることが可能になる、ということがあります。私たちはどうしても日本の歴史というと記紀にはじまるという観念から脱却できなくて、それが藤原不比等らの構想によって天皇家を軸にした構成になっていると承知しながらも、古代は茫々たる悠久の時間のなかに解消しがちであり、それ以上のイマジネーションを働かせることができないでいました。それが、これだけの事実を物的な証拠として突きつけられると、あらためて文明史のなかで日本の過去を復元する作業に取りかかれるということになるわけです。

② 三内丸山文化が消滅するBP4000年（縄文中期）から2300年までの間、すなわち縄文後期（BP4000～3000年）、縄文晩期（BP3000～2300年）の1700年間がいわばブラックボックスになるわけですが、そこに私たちのイマジネーションの活躍する舞台があるのではないか、と思います。

かつて柳田國男は「山に隠れたる人生あること」として、山民の存在にさまざまなイマジネーションを働かせ、また『海南小記』から晩年の『海上の道』にいたる海洋の系譜についても多くのことを書き残しました。また折口信夫はその『古代研究』において、さまざまなことを論じました。それらをこのブラックボックスに当てはめてみることで、新しい考えが着想できるのではないか、と思います。

また、大林太良氏や吉田敦彦氏らの神話研究にも、あたらしい光を当てて見ることがで

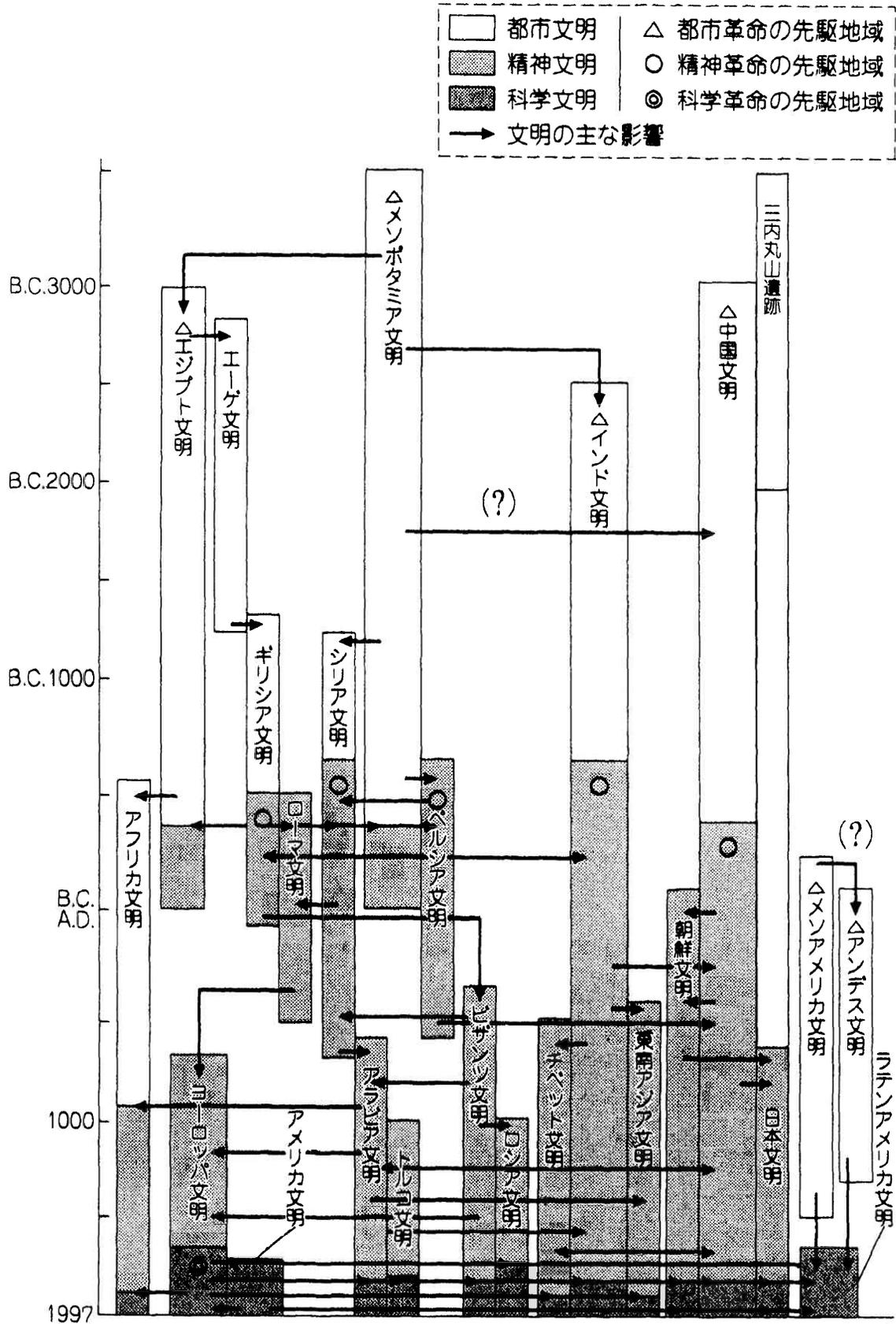


図 文明圏の変容と交流

伊東俊太郎編「比較文明学を学ぶ人のために」1997、世界思想社（一部修正）

きるのではないか。日本のアニミズム、シャーマニズムについても、この1700年を埋めてゆくことで新しい知見が生まれるのではないかと、とも思うのです。吉野裕子さんのへび一竜一水神信仰の研究なども、縄文研究の進展によって新しい検討が可能でしょう。

大和朝廷の中央権力と、東北や西南の周縁との緊張関係にも、さらに東北日本と西南日本の人口の逆転現象にも、いくつもの仮説を出してゆけるのではないのでしょうか。

③ 三内丸山文化とここで呼ぶものが、都市の起源、あるいは文明の起源とかかわりがあるのかどうか。梅棹忠夫さんはそこに神殿都市の起源を“妄想”されていますが、もし文明が“制度、装置、機構のようなシステム”という梅棹さんの定義でみるならば、ここに縄文“文明”の存在を高らかに提起してもよいのではないかと思います。

考えてみると、縄文人と私たちはDNAにおいてはおなじ組成を持っている筈であり、その喜怒哀楽の感情表出が、私たちと大きく異なっているとは考えられません。また、近代的な科学的知識という点では異なりますが、まったく別の論理でものを考えていたとは考えられません。そこに商業的な活動の動機がなかったとは言えないでしょう。

たとえばへびを見るとビクツとし、闇に恐怖を抱くというような私たちの習性は、また焚き火を見つめたり、川の流れの音を聞いたりする時の私たちの感性は、それぞれ動物行動学的な背景があるとしても、長い時間の記憶の中で、私たちの遺伝子に隠されていてときに発現する縄文の記憶かもしれないのです。

今年（2000年）の元旦に、私は求められて「京都新聞」に「日本文明ゼロからの出発」という文章を書きました。そこで私は千年紀単位でみる文明の時間をとりあげて、仮に日本が二千年の文明があるとすれば、それを二分してみると、いまから千年前は摂関政治の最盛期で、藤原道長の時代、「源氏物語」の生まれた時代であり、まさに日本文明が独自の性格をそなえ始めたとし、それから千年が経過し、いま新しい30世紀にかけての千年紀のはじまりにあたって、西欧中心の文明システムを、人類全体の文明システムに組み替えてゆく過程での、ゼロからの出発をはじめるときであると書きました。

それに加えて、弥生時代に先行する縄文時代2200年—二つの千年紀へのイメージーションの強化によって、日本文明のより正確な位置付けが可能になり、それによって地球時代、地球文明のなかで日本文明が果たし得る役割がより鮮明になると思います。

④ 歴史に倒叙方式という方法があります。いまから遡って歴史をかんがえる方式があります。内藤湖南はかつて、いまの日本の事物はおよそ室町時代にその起源をみることができると述べました。たいていの慣習、事物は、たしかにその通りであるといえます。その累積のなかで、日本文明が構成されている、と言っても過言ではないでしょう。

また日本人の世俗化（宗教はなれ）は、応仁の乱を経過し、信長の天下統一の頃にはじまったと思いますが、それを経過し、秀吉を経て、家康の保守的な幕藩体制のもとで江戸時代260余年のインヴォリューションの時期を経過しました。そして明治の天皇制、中央

集権体制によって近代化をすすめました。帝国主義、軍国主義のクライマックスを経て、敗戦によってその体制が崩壊しました。

以後は半世紀にわたる敗戦後の復興、戦後体制から、高度経済成長によって、大きく変貌しました。そして現在は情報革命を経験しつつあると言えます。1960年代のテレビの急速な普及もありました。さらに電話の普及に百年近くを要したのに対して、いま携帯電話の普及はここ数年の出来事であり、過去の電話をしのぐ台数に達しているといえます。しかもそれがインターネットで世界につながる事態になっています。日本文明はこのように実体を変貌させているのであります。

⑤ しかし他方で、水田稲作農耕を基礎とする文化の前にある縄文時代の再認識が進んでいるわけです。かつての狩猟・採集・漁撈社会を、野蛮・未開の貧しい社会とみなす見方は19世紀進化論の発展段階説に毒された偏見であることが、しだいに明らかになってきています。これはひとつには、現存する、あるいは現存していたとして記録のある狩猟採集漁撈社会が、すべて砂漠、熱帯降雨林、あるいは氷雪地帯に適応して生存している人々であったこと、そのいわば極限的な自然環境に過適応した人々の生活をモデルにしていたことによるものといえるでしょう。より快適な自然環境—温帯地域のような地域は農業牧畜に置き換わり、狩猟や採集、あるいは漁撈は農耕文明の周縁に追いやられてしまったのです。その結果、発展段階説の呪縛によって、私たちは抜きがたい偏見を狩猟採集社会とその文化に抱いてしまったのではないのでしょうか。

⑥ アフルエント・フォレジャーズという認識が登場してきて、狩猟採集社会とその文化についての私たちの認識を修正させ、偏見を是正するに至ったのは、最近数十年のことです。

三内丸山の縄文遺跡は、雄弁にこの再認識を促し、私たちにパラダイムの変換を要求しているといえないでしょうか。

⑦ 陸地中心の史観から海洋中心の史観への転換を主張している川勝平太さんとか、新しい網野善彦さんの仕事にも注目してよいと思います。網野善彦『「日本」とは何か』では、南北を逆にした日本列島とその周辺を示す地図を巻頭に掲げて、「日本」国の虚像をあばき、百姓の本質をえがき、根本的に日本史を見直すことを私たちに迫ります。文明の基盤には文化が存在し、それが文明のありかたを規定している、という事実は否定できません。日本文明の基盤には弥生時代以来の水田稲作農耕があることは明らかで、それを基盤にして日本という国家が生まれ、また耕して天にいたるようなピラミッドに比肩しうる耕地を作り上げてきました。制度、装置、機構がシステムとして機能してきました。近代化の過程では、それに中央集権体制によって、近代的な再整備が進み、さらに第二次大戦後には高度経済成長の結果、より強靱な文明の骨格が再構築されました。

あきらかに、現在の日本文明の基盤には、この農業文明とそれを基盤にした都市社会が

あるといえます。

しかし、5500年前に遡れる縄文の遺跡の長い、持続的な社会の存在が確認された以上、これを無視することはできません。ウルの遺跡、モヘンジョダロの遺跡、あるいは黄河流域や近年明らかになりつつある長江中流域の良渚遺跡などと、同時代にある縄文の社会の存在をも、私たちは私たちの祖先の営みとして認めなければなりません。まだまだブラックボックスは存在していますが、決定的な“文明”と呼び得る日も遠くないと考えたいのであります。

ご清聴を感謝いたします。

参考・引用文献

- 網野善彦『「日本」とは何か』講談社、2000。
- 網野善彦『日本社会の歴史』上・中・下、岩波書店、1997。
- 伊東俊太郎編『比較文明学を学ぶ人のために』世界思想社、1997。
- 上山春平・渡部忠世編『稲作文化』中央公論社、1985。
- 大橋 力『情報環境学』朝倉書店、1989。
- 岡田康博『遥かなる縄文の声ー三内丸山を掘るー』日本放送出版協会、2000。
- 岡村道雄『縄文の生活誌』講談社、2000。
- 折口信夫『古代研究(国文学篇)』折口信夫全集1、中央公論社、1976。 折口信夫『古代研究(民俗学篇1)』折口信夫全集2、中央公論社、1976。折口信夫『古代研究(民俗学篇2)』折口信夫全集3、中央公論社、1976。
- 河野正文「大井八幡神社の春祭り」と水系制御～沿岸開発とむら社会の最前線から～」第16回民族芸術学会報告要旨、2000年5月26日
- 河野正文「宮脇の水と祭りー大井八幡連合における自己組織化と葛藤制御に関する生態学的研究」(大橋 力、猪原真知子、河合徳枝と共著)「季刊人類学」16-2 pp.3-69、講談社、1985。
- 河野正文「水系制御と獅子の祭り」、「民族芸術」号民族芸術学会、Vol.11, 1995。
- 小山修三『縄文学への道』日本放送出版協会、1996。
- 小山修三・岡田康博『縄文時代の商人たち』洋泉社、2000。
- 徐朝龍『長江文明の発見』角川書店、1998。
- 速水 融「経済社会の成立とその特質ー江戸時代社会経済史への視点」、社会経済学会編『新しい江戸時代像を求めて』所収、東洋経済新報社、1977。
- 柳田國男『山の人生』(1926)『柳田國男全集4』所収、筑摩書房、1989。
- 柳田國男『史料としての伝説』(1923)同上。
- 柳田國男『山人外伝資料』(1913)同上。
- 柳田國男『後狩詞記』(1909)『柳田國男全集5』所収、筑摩書房、1989。
- 柳田國男『山島民譚集』(1914、1964、1969)同上。
- Steward, Julian H., (ed.) “Irrigation Civilization”,
- Wittfogel, K.A. “Oriental Despotism” 1957 (井上照丸訳『東洋的専制主義』1961)